

編集後記

<古沢元之助>

「胃と腸」の編集室には貴重な投稿原稿が集中していると聞く。本号はこれらの投稿された症例と研究の特集で、今回は腸に関する論文が多く、十二指腸嚢腫の症例、Systemic lupus erythematosus や Agammaglobulinemia における小腸の異常 X 線像など、教えられるところが多く、読んでいっているうちに暑さも忘れてしまう。また、Osler 病の内視鏡像、胃に多発性ポリープが発見された家族性大腸ポリーポージスの大腸亜全摘出術の胃ポリープの消褪など、掲載された症例の一つ一つが興味をそそる。

天疱瘡と胃癌の合併例の消長は、私自身、最近、31歳男子の胃癌患者で、胃切除後3か月目に、下肢に尋常性天疱瘡を生じた症例を経験し、黒色表皮腫と胃癌との関係にも思いを廻らして、皮膚疾患と悪性腫瘍との関係に興味をもっていただけない、興味深く読んだ。

研究欄では、反転による胃前壁撮影法（服部ら）はユニークな方法でもあり、美しい写真をみているだけでも楽しくなってくるし、新海真行氏ら、長廻紘氏ら、小林絢三氏らの論文も読者の研究意欲をかき立てずにはいないであろう。食道癌に伴う粘膜変化についての研究も食道外科に携わる者の日常抱く悩みに対して、一つの解答を与えている。

特定の主題特集号の他に、優秀な投稿症例、研究の特集号も、「胃と腸」を学究的な雑誌として国際的なレベルを保ち、一方では臨床医家の座右の書として発展させて行く原動力となることを念じて止まない。

<編集> 早期胃癌研究会